

天地龍者(天地龍素丸)
的傳冬の日註解抄

中村俊定文庫
文庫 18
960

9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9 170 1 2 3 4 5 6 7 8 9 180 1 2 3 4 5 6

原本寫本（中村俊定所藏）
表紙題字於丁乃終り二枚透字

水口

中村
俊定

的傳乃目註解抄

○文化下年、當堂爲同朗の草書並冊に（前者は此紙）
「葛飾の素丸」云々の様并記さるゝとあり。述す所
安を明らにして説本の冠たるものか、是需方ゆきよし、より
断りて素丸が記されたる處より再なるものをばこ、中に破れ
づ、謄ぶるゆあるは、去りや成しらくも素丸がうへ同を捕了所と
ゆ、——素丸何んとするん人は此素丸蓋の素丸とせしむべ
トあり、批評者なる位解し、一は今なきよし。
○此の古多月巻、椿の花のうへ、素丸作との句の註と「素丸創
下首」云ひ子と寂莫多うと上層で細くあはれは作する要す
ト及ふ、は又疑り起る一因なり（此書天地龍速かの也）
○素丸天地龍の号は天明二年より、葛飾葺乃今川至國
二兄弟、**此****素丸****太平****結野の****日次集**に**天地龍****素丸****句**
○素丸の註ぎむ所たりトは花やうめあふ面井より方面と云ふこと
とあり、天地龍初代は天明三年に号し門人我泉三代天地龍とな
る天地龍三代宗泉が雨ざりけ文に六年也卷末朱書見
原写本の字は**次**天地龍に非ず、之は誰ぞのや書歟、

原字本逸字一枚

方此註解

木加性多竹海竹龍茶

尾張乃國小竹部ト云る程其は人子
用乃者近き是より程其乃者女けふ
たとりし津我ふ國思ひあゝと云文
ありるも此津に似るる名と野川
亭より移乃句也
寺々やとハハ程其乃山々を
走りて見せぬなり乃山々を

ハ竹井ぬりひきは山菜花を毎すまふ
とけ古事と云限やまふなり

有明乃主あふ酒屋造くを中

山菜花志をるし酒をと將し所なり

あふ乃あふとふ水司物なり上より

ふ秋新酒切あふ軒より此行を

又を造り乃あふ軒より山菜花

さけけ水さハ天子乃御酒造家者

かーア酒の酒をふるふあふなり

是ハ名の酒をふるふあふなり

此行は本の筆者違ふなり人を重複なり
事や常の酒をふるふあふなり

朝解の酒をふるふあふなり

一語の酒をふるふあふなり

是酒なり朝解酒なり

曰のちーに錦に米も甘し

あふ米より酒の二つ

あふ酒は酒なり

その酒に酒なり

曉臺
日なり
三巻一
四巻の

去越地の柳をた
川谷二つがみ
あふとちふか

新なるものなるをあらはし曲也
 外に註釋ありと作れ能文也
 此は風流なりト能文論あり

新なるものなるをあらはし

新なるものなるをあらはし

新なるものなるをあらはし

新なるものなるをあらはし

新なるものなるをあらはし

新なるものなるをあらはし

新なるものなるをあらはし

新なるものなるをあらはし

新なるものなるをあらはし

新なるものなるをあらはし

新なるものなるをあらはし

新なるものなるをあらはし

新なるものなるをあらはし

新なるものなるをあらはし

新なるものなるをあらはし

新なるものなるをあらはし

舟の舟くくはちん

前の柳を水に流して舟と舟をくくは
はちん

舟の舟くくはちん

前の柳を水に流して舟と舟をくくは

舟の舟くくはちん

舟の舟くくはちん
舟の舟くくはちん

二の舟は舟の舟くくはちん

舟の舟くくはちん

舟の舟くくはちん

舟の舟くくはちん

舟の舟くくはちん

舟の舟くくはちん

舟の舟くくはちん

舟の舟くくはちん

舟の舟くくはちん

此註
此言
言と
入たが

吾れは之を遠くおぼるなり。

此の前のうみとまをわはたせしなり

今を恨み矢と放つなり

前よりとは此の處せし女あるが外に行て寵愛
又強り捨別するを愛するは義なり
心と解して附なり

盗人の記念の松の吹折れ

前より矢と放つと云ふ外は已に附なり 此の前の国

此の松の吹折れ

志は 山寺の松の吹折れ

宗徳は連法師也る其徳國の薨り跡有其所
の松と白きれと云ふ松法師の白きれと云ふ

此の松の吹折れと云ふ松法師の白きれと云ふ

此の松の吹折れと云ふ松法師の白きれと云ふ
此の松の吹折れと云ふ松法師の白きれと云ふ

此の松の吹折れと云ふ松法師の白きれと云ふ

此附は甚きうひまを致し足並し附り

もし一様しは人の骨か何

廿五日山所山廻りて足附を連骨牛の
骨を折くるなり

馬賊は及ぶの國のくわかん

前碑は人の骨か何とあるを折し附
たりと部家に悉くとてありて附を致し下
より火をかけひき三つあるを附の卦四角を

何の卦と卦を致し易の書をもとに有る古歌有り
思ひあふる所のいふ言ははしきなりとて我
身せけしはちなりと云ひすの國をばいの甲を
以て白ひきするなりと推量の附也

あふれさる謎のめしなり

なまふ前より附へたりとあるは人骨に
て附を致しちなりとあるなり

此附一斗あり足並し夜を
前謎ありと云ひ附を致し附なり

又天女を以て刺を中事有長女の刺
をすあらうなり

日東の赤子白の髪はけをて

李の二斗詩を念^ふと云ひけしを
と名のありあらは実の用なり

巾の布種をまきし要也なり

ひはうちはいはは肺也日名の席と^{いふ}なり
さうなり

牛の端とあらふなりなり

中
國九なりなりなり馬の足はなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなり

無に解のなりなりなり

なりなりなりなりなりなりなりなり

なりなりなりなりなりなりなりなり

子ありなりなりなりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなりなりなり

刻るを
かくト

今更けのまゆかきよゆ
懐妊すまゆと制是をまゆかきと
悦色但し親類の制也くまゆさ
るまゆは悦んあり也

此註
前句を
大内かき
眉書とし
た

結
ひく 居馬志加のたけ

前句を大内かきのまゆかきと見極し
附り志加は昔より都るれ也

廊下はあのかつたあか
その場の附也

壮年—未不振

初をいふ年の終り着て歸る

此は尾張公の下に也若年の次は尾雅正子世
をのまんとし未だ壮年を官を遊出
きよ前文也句意は毎終るまゆ勤今年の雪
の降るまゆつとあり也

霜よりいへる雪の人の

仕官の身は朝早く起食をも勤の心をあら

朝ト節也ト至ト對附也

野菊香時菊如雪

眼を射るめしと云なく秋季を附たり冬の時
 子春を附秋の子夏を附事有妙附子と知る
 し是を季候りの括と云

ろつら
ろつら

蝶の
~~舞~~
 舞臺
 之
 足
 跡

魔
月
神
子
鞆
鞆
王
子
子
子

前々都立の校長より御学事とし、是御事
すゝとは分家した公達の手を去る

北花を
欠けの字

貞徳別号を長頸虎と云ふ是より、
月と云ふを志しりかく財なり
と云ふ貞徳昔一日に桃花の露を
有故に三千金と云ふ位なり

而心中
懷香
因懷
以
之
入
之

いふは後秀山の遠田博士名物也貞徳公へ
通ふは是をわが書り有し古事有

るもの如月をたへあひなちく

此後秀山より休けなり

床をを寝たけいそある国男

可き月とあくとあは旅人と見たりわが
夜更のあけするは此人いそありかゝる事
はまし世は有る人さしあり

いふは後秀山より休けなり

此人を孫公事と論あとし國王と出たる人
と見え所なり此人を孫公事とわがわが
いふなり

口と痛ちあひあひる

恨み強しと古詞をあらうとからけり

明をかりしと目送るせん
ちかひあひるは運書なる武者とわが
て討死と覚悟極め——さしあり

山三つゝ 雲といやふうらむ

いふちは君連なる児也最早かくし極み此れは今
更ふけにあらぬはずとありてしめるは武
士の勇気と云ふし然るはあふ句まつみ
すゆはかくし せし附る事 能治の
死後と云ふ

月は遠くの牡丹 ぬきく

前句を常、酒宴と見え牡丹一本登み来
て床にいけぬと云ふしなるも也

編

あふのかりは破れ 雲ありて
牡丹咲く時と見て附る

出

と云ふ也 前句なる所

前破れ 雲ありてと云ふは山まはるし 町
と云ふ 石切屋と云ふなり

の花の世を花

花のうらみ

町を花の世と云ふ 前句なる所 故に
花のうらみと云ふ 花の世は花の世也 町也

かゝるいふのやをいふや

ちいれぬは所あるやいふやいふはたぬや

櫛の櫛を解すやぬのふかある

此の思ひすまゝと云ふの女中と見直

し櫛指はあらまゝとは正しき中なる鏡
解をまゝに事一有

等起と命題と解し

解すも是と其場の解也

櫛の櫛は櫛の櫛にひし

前より櫛の櫛にひし櫛の櫛にひし也

三つの櫛にひし櫛の櫛にひし

石の櫛の櫛にひし櫛の櫛にひし櫛の櫛にひし
から所なり

道をたぐひて櫛にひし櫛の櫛にひし

三つの櫛にひし櫛の櫛にひし

片きりーのうしろ

ある事を忘るゝある年より忘れ

奉加のしるしを黄包うちぬ

子の老人奉加杯する人と別れ

一の命のトニそー

奉加の伯をぬふとち別れ

送地。あきるふとふのふ

まゐりて

まゐりて

送地。あきるふとふのふ
まゐりて

はるばる

唐端のふとふのふ

高きぬまの臨海より

徳にすして志の結ぶねん後の赤か
此の人高き今形佛伝るを寄せし老
女とて臨海を待とは臨海の向を待より

秋の戸をあらさく都へは

是は禪家の問答とて所より

蔵の奥つゝふまはつり

了て形あらぬいなる心は来も

る所有と前々對しなうと見えし

袂より硯をひいて山より

夏の雲の影散る場と見て附より

しより典侍の廊の内侍か

袂より硯をひいて山より
月夜をめてすをいふはと見えし

三日の花散るを待とは

あまのうらひの草は日影のうらひ

ふのうらひを解あけの草

あまのうらひを天子へまはさるあり

ふきくふのうらひをうらひ

うらひのうらひをうらひ

あまのうらひをうらひ

其草のうらひ

うらひのうらひのうらひ

あまのうらひをうらひ
うらひのうらひをうらひ

うらひのうらひをうらひ

あまのうらひをうらひ

うらひのうらひをうらひ

あまのうらひをうらひ
うらひのうらひをうらひ

若き人としは後世の事

と云ふ事は治めて茶の名物也

朝日欠ぬちちの旅おし

と云ふ事は知しぬちちの事なり

に花買ふ事 此の事なり

と云ふ事は

ぬちちの事なり

よき事なりはぬちちの事なり

金持の事なり米ありと云ふ

ある事なりぬちちの事なり米あり
と云ふ事は

ぬちちの事なり

米を運ぶ事なりぬちちの事なり
と云ふ事は

ぬちちの事なり

大水の跡に大魚のよりしきも也昔日の国に
晴く云所に鯨やある所都の作佛と云ふ事有

縣に花見次郎と云ふ所ありて

日向国に次郎と云ふ長者有都に名
高き花見と云ふ所と異名を云ふ也

五形 花みれの留 **豊後**

その人のなくさみ行じけと云

く川にけと云ふ事有ありと
云ふ所の所あり

毎晝の馬のゆめをみたり
前を望む方とて附たり

同様に矢部、橋のありて
馬の居所を橋と云ふ所あり 附たり 此橋三河
国名所也

此所の所をみたりと云ふ

もふきふし松を割ち舐め

捨し子と母の別なきのひつゝ

此の松をよむは其の古の松と見て
昔捨てたる子と思ひせしなり

暗を寒く刀をさす

此をさすは人の心をさすなり

その狂島の國の定めつゝ

神家の長閑堂と云ふ、昔二祖大師禪子
坐は重し長閑堂と云ふ事あり

禪の高僧がに油をとく

高僧寺の好也也し仙臺宗公請出
品川を海に投入し事あり其時佛頂禪
師波、はちを吊ひぬるあり其禪
禪に油をとくと所なり

あれと禪を捨ちのめり

前より種即捨しず運びて所長し
樽よりひつりよせんと云ふ所也

芥子園子
卷之二
名畫
禪
壯心

昔
け
の
教
と
己
を
悟
し
去
師
有

三
日の東は晴く
随々あり
芭芭

けしやちよ
日暮時
ふあり

杜湖吟序

[illegible]

に
る
事
を
ゆ
る
し
て
王
を
改
め
る

湖とちやう詩人甚自りそはせとち放ち
たちと

あやめ 念佛救をへん

け世を救ふと有少は念佛を聞て帝
を親しむと云ふ

乃ハ爲サレヤコトハ
 念佛を爲サレ共人アリ

思ふ可うもあつた帯

前起つてゐる人待とるゝ恋の附
門へ出たさう也

こゝろ花の咲かぬ入

前よりゝ恋のこゝろ人となつて
花より曲の節也

其の日のとれり

望の月十五也望月十五也
月和のちのちの西の日は死
其意を以て恋のこゝろ人となつて

難波津、若火焼家いふけを

炭賣のちのかつまゝも

すみうりなれはこゝろあつた
かゝみの句也

しる粒ひを鏡裏の寒

来るのふもせ鏡を裏の心と

花棘馬骨のあつた

前の「さあ」と云ふ帰花と所を是を字
留の字と云ふ「りて」とて字留を以てし

形をすすむる月かなかり

まとうり種をる見やりなり是を種
り有り月は常住不變るれはかくつり来也

風をぬれ日解みゆあるら

形をる人何處のあし圖を
あひたるさう也

甘萩織をる市を振るす。

萩織をる市を振るす。画

加多利川や明廣をみあや、近——

甘萩織をるあやに高ふきと見え附たり
かものさしと云ふを好みし所有甚なり
すしと云ふを極す。

いさゝかの解をるあや、近——

あや近けに解をる也。加多利川や明廣をみあや、近——

あゝ事有様うたゝまふし

御事ありしに ~~北~~ 大い思ふことあるやう

うちは廿ちを越る三車

思ふにうたゝまふしにうたゝまふし

持ててくゝあゝおのの歌れ

一

うたゝまふし ~~北~~ 大い思ふことあるやう

くわはすおとまふ

うたゝまふし ~~北~~ 大い思ふことあるやう

前々のおのの歌れとあるは、
前々のおのの歌れとあるは、
前々のおのの歌れとあるは、

前々のおのの歌れとあるは、
前々のおのの歌れとあるは、
前々のおのの歌れとあるは、

前々のおのの歌れとあるは、

前々のおのの歌れとあるは、
前々のおのの歌れとあるは、
前々のおのの歌れとあるは、

前々のおのの歌れとあるは、

かりてあることより時々の所也、本御にははる
諸武士あるはるかゝる事折なりあり

冬より御定ちくる。し
本御のセツヤ人おね、御定作ふ方こ

花より梅の徳とすこふなり

まひい出るより花よりお
まよりいれと捨れり也

花よりいれ、款冬と君

花よりいれ、款冬と君、カントウ山也

白燕、白の水、白の羽、とあるは

出、白の水、とあるは

言、かゝる叙とあり

白燕、白の水、とあるは、昔の名、銀治、
也、月山、也、天子の御、世、叙とあり也

八十年、三、とあるは、母ありて

政、清、との長、命、あるもの、と、
る、とは、曲、郎、也、老、子、の、み、と、あるは、也

なまじりきりきりきりきり

十年三きりきりきりきり

西車桂の花のつぼみ

昔時女桂の花月の異名也

蘭の油はくわくわく

前を黒い油のつぼみきりきりきりきり
を油のつぼみきり

つぼみきりきりきりきり

蘭の油はくわくわく

つぼみきりきりきりきり

はなはなはなはなはなはな

前、栗正月餅のつぼみきりきりきり
昔時、花のつぼみきりきりきりきり

つぼみきりきりきりきり
糸慶のつぼみきりきりきり

寧ろ旦と飯後の急起を

此の三條より出て三條より出るべく
起はる早く起る

云々かす一南京の地

名物なりは土地のようき妙を知る
すし雲から一土地よきとある

いかにして清く静くぬくの像

土地よきと有れども人の像を知る
像

泥よりのきききき

其場を廻附也

粥すあかつき花よりこぼり

心のすきと云ふ新義のまくと附り
是の地の附り

将衣のゆるぎのすき

前を出陣の武者に転じ

士のちかくいふ

此のころ名物と惜みある

ありしを夢に 責めしを
あくし 篇の せうきと
し せうき 花の けしきと

田家眺望

新日や けしき ありしを

ありしを 夢に 責めしを

ありしを 夢に 責めしを
ありしを 夢に 責めしを
ありしを 夢に 責めしを

此巻を 尾張 五節仙と云ふ
附は 此巻 一生の 出来事と目録
の目と 名所なり

榎梅山家 休とありしを

是字留の 第三也 昔は 五字 一名と云ありて
鳥の 名を 留めし 小な 字留 第三
百の 名を 留めし 五字 一名と云ありて
定り也 又外に ありしを 留めし
と云ありし 留めし 留めし

ひさし牛の塩漬

前山家の持牛了くは甚き也也燈
とふけりとは自病也此つゝ之故所をも辨る也

と云ふけりとは
自稱智識
此の
之故所
其也

吾々の具足は心のうちにと
前記碑文（王宮）と云ふ

前王陽明先生手書

酌取童蘭功

前軍靜河安佐也其意也

其也童也

秋の連交あり

酒宴の味を尋ふ座と稱しなり昔葉平車下り
の時宴をの裾よりほえききとて遊ぶありし事
今に宝物有りと有りまいたまふと云ひ也

新
中
乙
不
二
見
中
子
子

是法之善也

寂
と
椿の花の
子
音

素心の教訓

衣をみを寂し莫きのうとと父ちち等らをを細こくく香か水みづをを作つくるる五ご

廿五

糸於金除了風香

椿の庭前とて女共糸染の衣あり
茶の室に深きとて曲師と見ゆ

茶の事
傳ふは曲節と見ふ

三丁豆の白
註
巻
寂三

倭の輝

華

維也な馬子の子五三

糸深と云ふ女と附たり昔は女馬子
まじり

なまを所こひの所衣

前高し女よりわろ殿のみ
よ(山吹を)解し女武者附たり

其より山備の櫻見玉

なる木を所はまきと解り

麻子と云ふのほあま

前を因縁人ともえり

江より(河)を流る世を捨

前の人を西の極と云ふ

女より出よはあま

前とあるあらはれたる人にて
そせ出まむとの事也

花衣の節を花とけり

あはれなるうきよき平家なる人なり

美濃のゆきや木代の山あり

いふは花より。昔の山あり

骨より花。同じくみうちあり

山同骨あり。見え世を翻しなり

乞食の義を貰ふ。うきよ

いふはお付なり。身をあらうしなり

転りなり

花より骨より。知を拾ひ得て

唐土王凌と云ふ人の母の病を助んと云ふ人を
面んと云ふ人を。一心を孝と云ふ人を。大に
孝と云ふ人を。其の孝なり

花より骨より。知を拾ひ得て

けしき甚だの大王王凌と云ふ人を。大に
孝と云ふ人を。其の孝なり

花より骨より。知を拾ひ得て

花より骨より。知を拾ひ得て

さしあはれ 甚堪

蘇子あまの
草 ~~草~~ 交リ
おまを

あまのちからあまのすゝめは切也

大正七年三月廿一日

少切と云ふ事の意前を正し

部
政
基
附
所

五
十
三
日
月
日
年

是曲の如くありては合のや

子
柿
2
包
根
子
子
子
行
底

乙
 海
 子
 外
 甘
 味
 の
 味
 と
 是

五
豆府之里
母の表

[illegible]

所しおさびの
書きし方と

ゆきのはげに、新儀の悔より、其伯母は元政
法師の孫ありし時、身なり如、孫の外
え政を愛し、あひとあり、その秋、作
りしころ、孫をたどり

伏見にけし、よかぬ花をう

伏見市、伏見市に、ゆきのはげに、新儀の悔より、其伯母は元政法師の孫ありし時、身なり如、孫の外え政を愛し、あひとあり、その秋、作りしころ、孫をたどり

色、色、

花の咲く、花の咲く、

も、も、

す、す、

以下、以下、

猶、猶、

水、水、

あ、あ、

ま、ま、

か、か、

山、山、

け、け、

山、山、

追加

へうたんとて冠西牛とて川を渡
あゝまきひー降て牛ふあゝまき利

様とてあゝ家枯とて乃松

そ場な利にそあぶとハ枯枝あり
あり先酒とあゝまき利

木城新下とてあゝ家枯とて乃松

十あゝ乃松とてあゝまき利

松とてあゝ家枯とて乃松

木城新下とてあゝ家枯とて乃松

新下とてあゝ家枯とて乃松

あゝ乃松とてあゝまき利
松とてあゝ家枯とて乃松

たりに橋我とてあゝ家枯とて乃松

そ場な利にそあぶとハ枯枝あり
あゝ乃松とてあゝまき利

天地庵は天明辛巳年七月七日
あゝ乃松とてあゝまき利

天地庵は天明辛巳年七月七日
あゝ乃松とてあゝまき利

天地庵は天明辛巳年七月七日
あゝ乃松とてあゝまき利

水月庵



水月庵

کتابخانه
مخطوطات
مکتب
مقدس